フォーラム

スポーツのソーシャル・パフォーマンス†

広瀬 一郎*

The Social Performance Expected of Sports

Ichiro HIROSE*

Abstract

Current societal issues cannot be understood simply in a "conflict of interest" context. The reason is that such problems concern everyone who is a part of the society, and are issues in which no one is uninvolved. The term "social performance" postulates something that you, as a member of society, can do for it, and how you can make your own contribution. This phrase, introduced in America, is aimed at solving problems through a positive rather than a negative approach.

The term "social performance" very accurately highlights a major problem in sports. It is now necessary to ask: "Why sports," rather than: "What are sports?" Why have sports become so popular the world over, as is the case today? When sports assume a significant position in a society, it is inconceivable to determine what sports are without asking the question "Why?"

The social performance expected of sports could perhaps be described as including the following five elements: One is *moral*; and the second is *life*. Sports provide life with an instinctive sensation of existence, along with the feeling that one's identity is confirmed. The third is *global*; and the fourth is *community*. Sports revive and reunite disintegrated communities, as well as create new interrelationships and exchanges. The fifth is *costs*. Sports respond to the concept that people can lead enriched lives at a relatively small social cost. However, there is no one and absolute answer as to what is the appropriate social performance for sports. The people involved need to make their own choices. In Japan the time has come for sports, which have been held in disregard, to be thrown open to society and for its proper social value to be acknowledged.

Key words: Social Performance, Global, Moral, Community

1. はじめに

今日テレビでも新聞でもスポーツを取り上げない日はなく、身の回りを見回しても街にはス

ポーツがいたるところに溢れている。スポーツは身近な存在であるにも関わらず、必ずしも認識の一致をみていない。スポーツに関して玉木¹⁾は、明治時代以来、スポーツが体育と混同して

†原稿受付 1999年4月22日

*株式会社電通

〒104-8561 東京都中央区明石町8-1 聖路加タワー

*DENTSU INC., St. Luke's Tower, 8-1, Akashi, Chuo, Tokyo, Japan (104-8561)

考えられ、『スポーツとは何か?』という問いに対する正しい認識が根づかなかったとし、スポーツとは誰もが自由に参加し楽しむ事によってつくられる人間の遊びの文化であると述べている。しかし玉木²⁾による指摘でもスポーツの本来の概念に関しては不明確である。こうした「スポーツ概念」の不統一がスポーツに関する議論の混迷を招く一因であり、「近代スポーツ」という身体活動に関する認識も百出している状況がみられる。

従来、スポーツを語る場合に歴史的に古代にまで遡り、系統学的な説明をする傾向がある。それは「近代スポーツ」を「前近代スポーツ」の存在を前提として、その対比の中で規定しようという試みであり、「前近代スポーツ」との相違よりむしろ「スポーツ」としての継続性や共通性から、系統的な正統性を説明することに力点が置かれている。「近代スポーツ」の概念の歴史的イデオロギー性を無視して「近代スポーツ」や「アマチュアリズム」、「フェアプレー」の精神等を所与の無謬なるものとすれば、現在のスポーツにおける問題の所在もその処方も見えにくい。例えば「近代の終焉」や「ポストモダン」と言われる現在、今後社会が脱近代化を果たすとしたら、その社会に適應した「スポーツ」という存在を「脱近代スポーツ」や、稲垣³⁾のように「後近代のスポーツ」と呼ぶことになる。

現在、スポーツについて直面する諸問題の多くは、前述のように「スポーツ概念」の拡散から生じており、それらは社会の脱近代の問題と密接な関係を持っている。今福³⁾は、近代スポーツが近代のロジックの体现者である以上そのロジックが破綻を来している現状で、むしろスポーツの中に現れている問題を見ることによって、世界の脱近代化がより明確に見えると指摘している。「近代スポーツ」が、「古代スポーツ」の正統な継承者であるとして歴史的な正統性を誇り、したがって「近代スポーツ」こそがスポーツの発展した姿であるかのような言説にはもちろんある程度の歴史的な根拠は認めざるを得ないが、それはあくまでもある1つの歴史的な見

方でしかない。重要なのは歴史的な必然性を認めつつ、その必然性をこそ明確にすることである。つまり必然ならしめている社会的条件が変化した時、もはや「近代スポーツ」なるものに拘泥する必要もないことになる。

本論文では、身体活動という物理的定義の共通性によって古代からの身体活動を一括りにスポーツと称し、単に古代や近代といった歴史的な区分によってスポーツを認識するのではなく、ある身体活動がその時の社会において「いかなる位置を占め」「いかなる機能を果たしているか」、つまりスポーツのソーシャルパフォーマンスを考察することの必要性について検討するものである。

2. スポーツの概念

2. 1 近代以前のスポーツとは

そもそも近代以前にスポーツという認識があったのだろうか。スポーツという概念が、社会の中で明確に意識的に形成されるのは近代以降のことであるとする、スポーツに近代を付けて独立したスポーツの認識を生成する作業にはイデオロギー的な意図が含まれているとも考えられないだろうか。もっともスポーツをブランチャード⁴⁾のように「ルールと競争の要素を持ち、肉体の行使を要求するゲーム類似の活動」等と定義し、「ゲーム」、「儀礼」、「闘争」、「体育」、「レクリエーション」等の概念要素について言及すれば、近代以前にもスポーツの原型と呼ばれる身体活動がある。問題は、そういう身体活動が社会においていかなる意味を持っていたのかということである。

トマ⁵⁾によれば、現在認識できるスポーツの明確な最古の絵画表現は、シュメール文明の初期王朝時代(紀元前3000年から1500年)の遺跡に認められ、ギリシャ世界の陸上競技に関する最古の言及は、ホメロスの「イーリアス」、「オデュッセイア」の中に見られる。我が日本でも「日本書紀」に描かれた「相撲」の原点と言われる当麻蹶速と野見宿禰の対決や、大化の改新の発端となった蘇我入鹿の暗殺が中臣鎌足と中

大兄皇子により法興寺の「蹴鞠」の時に企てられたのは有名な話である。またトマ⁶⁾は、「スポーツ (sport) という語は、「はしゃぎ回る」を意味する動詞デスポルテ (desporter) に由来する、古フランス語の名詞デスポール (desport) から派生し、その文献初出は12~13世紀頃とされている」と述べている。これらのスポーツと呼ばれる身体活動が、シュメール王朝から現在まで約5千年の間に当該の社会において担ってきた役割は大きく5分類されると考えられる。

1. 宗教的側面 祭事の一環として、また儀式として
2. 政治的側面 戦争など闘争の代替物として
3. 娯楽的側面 行う娯楽として、または見る娯楽として
4. 教育的側面 近代国家における兵士教育と特に産業革命以降は産業社会の成員にするための体育として
5. 健康的側面 現代人の健康維持のため

ただし、これらの5分類も後世の社会的な文脈が解釈の基盤にあり、当時の人々がどれほど明確にそれを意識して身体活動をしていたかどうかは不明である。近代になって「スポーツ」という概念が確立した後、その「スポーツ」の観点から逆照射して可能となる分類とも考えられる。古代スポーツもスポーツであるという言葉は、例えばリヤカーにも車輪が付いているのでカー（自動車）ではないかと今日の人々が分析するようなものである。これは、文化人類学的にある程度の意味はあるものの、自動車社会の今日的な問題点を解消するための実践的な検討にはあまり寄与しない。

2. 2 近代のパラダイムとスポーツ

現在行われている競技種目のほとんどはクリケットを唯一の例外として、統一されたルールやゲームを管轄する団体が19世紀の後半から20世紀の初頭にかけて集中的に形成され、現在の形が完成された。19世紀に近代スポーツという

概念が形成される上で最も重要な役割を果たした要素は、大きく分けると2つある。第一に「近代」自身が当初から孕んでいたパラダイムに基づくものと、第2にスポーツが近代のパラダイムの中で認知を受け正当化されるためにスポーツ自らに付与された価値観である。前者は近代のパラダイムの中で「合理主義」という思想や「国民国家」という観念に集約される。合理主義に裏打ちされた「科学」という思想は、産業育成、殖産興業を善とし、それを目的とした国民国家というシステムを社会の基本単位と位置付ける。

もっとも西洋において「国民国家」の成立には、「合理主義」と同時にそれと相反する「ロマン主義」という思潮が大いに役割を果たしている。この事実は、スポーツ概念の成立にとってもまた大きな影響を及ぼしている。ロマン主義はもちろん19世紀における芸術、文学活動における1つの潮流であるが、それが政治的なものに流用されると民族的な考え方に結びつき、往々にして国民国家のイデオロギーとして採用される。特にそれはフィヒテとワグナーなどに代表されるドイツに顕著であった。そのドイツにフランスは独仏戦争で惨敗し、グレコローマンの正統な継承者としてのフランスの自負は粉碎された。戦後、敗戦の理由を兵士の基礎体力に求める声が力を得、国民の体力向上を目的として体育教育が全国的に展開される。鹿島⁷⁾は、「普仏戦争のあと、最初に体育教育の必要性を説いて政府に必修科目に取り入れるように要請したのは、医者と衛生学者だった。」、「なかでも“獲得形質は遺伝する”とするラマルクの進化論は、彼らの主張する体育教育導入の大きな根拠になった。すなわち、思春期の若者を体系的な教育法に基づいて肉体的に鍛練し、健全な成長を促してやることであれば、そこで獲得された形質は遺伝するから、次世代においては、短軀、发育不全、体格異常など民族退化の兆候は減少し、民族再生への道を再び歩むことができると考えたのである。」と述べている。

陸上競技の復活者にして五輪の生みの親であ

るピエール・ド・クーベルタン男爵は、フランスの体育振興という点で重要な人物である。クーベルタンは熱烈な民族主義者でありまた右翼思想の持ち主でもある。女性のオリンピック参加に最後まで抵抗したのもクーベルタン男爵である。その晩年は、「オリンピック競技大会」を国威発揚の場として明確に位置付け、それを実践し実証したヒトラー大統領の庇護の元、ひっそりと暮らしていたのは象徴的な話である。いずれにせよクーベルタンが単なる運動競技の国際大会創設を「古代オリンピックの復活」と位置づけたことが、成功を収めたキーポイントであり、それはこの時期の西欧世界におけるロマン主義の流行とも無関係ではない。鹿島⁹⁾は「クーベルタンの勝利は、ヘレニズム文化によって形成されたヨーロッパ社会をスポーツという形で再統合するのに、オリンピックというヘレニズムの象徴を持ち出したという点で、まぎれもない理念の勝利だった」と分析している。もっともロマン主義がスポーツの普及に寄与したのは、この近代オリンピックの成立という点のみ例外であったようだ。鹿島⁹⁾は、「ロマン主義は19世紀の後半のフランスでは、肉体の行使を蔑む傾向に働き、むしろスポーツの普及振興にマイナスに作用した」とも指摘している。

ところでクーベルタンが金・銀・銅メダル授与というアイデアをパリ万博で得たというのも有名な話である。そしてこの万博こそ世界の産業主義化の先駆けと位置付けられるものである。「近代」の「合理主義」は、現実には「科学万能」による「産業主義」として顕れる。拡大・発展・向上を是とし、結果を求め努力すること。努力は報われ、努力を怠る者は結局敗者となる。そして最も工夫と努力を重ねた者が勝者となる。これらは全て近代の合理的産業主義の基本的考え方であると同時に「近代スポーツ」の考え方でもある。

その考え方が最も意図的に現れたのは1855年に開かれたパリ万博である。この万博は産業ユートピアの実現というサン＝シモン主義に裏打ちされ、ナポレオン3世の全面的支援のもとに

開かれ大成功を収めた。注目すべきはその名称で、1851年に開かれた第1回のロンドン万博は「グレート・エキジビション（大きな展示会）」であるが、パリ博では「ユニバーサル・エクスポジション（万国博覧会）」となって普遍化され、世界化する方向が明確化されている。つまり近代スポーツも万博も英国で生まれ、一度「フランスという場」を通る事によって普遍化＝世界化のスタートを切っている。

そして歴史的にも両者は、近代の産業主義という考え方と価値観を世界の人々に植え付ける視認性の高い具体的装置として作用してきた。実際、英国やドイツではスポーツを専ら自国の繁栄に繋げようとし実績をあげていたのに対し、クーベルタンはフランス流の普遍主義の方向を意識的に目指していた。

近代のパラダイム構造の一つに「理念」と「啓蒙」というものがある。この二者はパースペクティブという関係で結ばれている。つまり「理念」の実現という目標を設定し、そこへ至る方向と距離感がパースペクティブと呼ばれる。「理念」はある時は「自由」であり、「平等」であり、「平和」であり、「民主主義」であり、「進歩」であり、「独立」であった。そして「理念」の実現のために「啓蒙」という運動が要求される。今日あらゆる活動は啓蒙的であらざるを得ない。啓蒙はまた伝達すること、つまりあらゆる類のコミュニケーションの発達を当然促すことになる。啓蒙を担う者と、啓蒙の対象となる者の両者が市民と呼ばれる者達である。近代の成立とともにその体裁を整えたスポーツもこの埒外に置かれるものではない。「理念」を持ち、その実現に向かう啓蒙的な運動がビルトインされていたのである。このことは五輪の開会式におけるサマランチ会長のスピーチから、地元の小学校の来賓挨拶まで、あらゆる場面でスポーツが啓蒙的であることから明らかである。

2. 3 アマチュアリズムというイデオロギー

第2の点、スポーツの社会的な正統性の根拠としては、「アマチュアリズム」という言葉が象

徹的にその役割を担っていた。「アマチュアリズム」の概念にも2つの側面が存在する。1つは騎士道精神の流れを汲む精神性に関する部分、具体的には「フェアプレー」とか「友愛の精神」等であり、他方はプロフェッショナルに対して語られるものである。両者とも出自は等しく、ある階級の哲学として発生しているが、前者が今日も妥当性を維持し得ているのに対して、後者は今や存在理由を失いつつある。

プロフェッショナルに対応するものとしての考え方には、余暇を享受できる特権階級がスポーツを独占しようという意図を持ちながら、それを隠蔽するため「アマチュアリズム」という言葉をイデオロギーとして取り込んだという側面が否定できない。したがってこの考え方に拘泥し維持しようとする、どうしても現状と遊離した分りにくい議論になる傾向にある。この点ワールドカップの創始者として知られているジュール・リメ、国際サッカー連盟第三代会長は今世紀前半に早くも指摘している。

リメ¹⁰⁾はアマチュアについて熱心に語る関係者を「スポーツ道学者」と呼び「広範で民主的なスポーツの世界の中に、一種の国家内国家を作るため、つまり閉鎖的でやや尊大な少数独裁制の範囲を限定するためにアマチュアという言葉を使う」と述べている。更にリメ¹⁰⁾は「アマチュアという言葉はスポーツ用語に導入されるとともにその言葉自体の意味が変わってきている。」が、「本来の意味ではアマチュアはそれに付加した言葉によってそれぞれの分野への好みを意味するだけのものである。」として彼等がアマチュアを資格として取り扱うことに異を唱えている。さらにリメ¹⁰⁾は、アマチュアについて規定しようという議論を「こうした議論は、まったくむなしきもので、重要なのはスポーツ、特にサッカーのもつ社会的価値、人間的価値である。」と述べている。

確かにアマチュアリズムはアマチュアの派生語であるが、本来の意味を逸脱し、ある階級のイデオロギーとして使われているため議論が非常に分りにくい。そして少なくともサッカー

という競技発展のためにはあまり有用ではないことをリメは見抜いていた。70年代になってアマチュアリズムがなし崩しにされ、74年にアマチュアリズムの権化であったオリンピック憲章から出場資格として遵守され続けていたその字句が抹消されるが、それに先立つこと30年前にリメは既にそのイデオロギー性を指摘していたのである。因みに1914年に開かれたFIFA総会において、スイス代表から提出された「オリンピックのサッカー競技をアマチュアの世界選手権として認める」という動議が採択された。しかし各国協会によりアマチュアの解釈がまちまちであったため、リメは「審査も定義も難しいアマチュアリズムの束縛から開放された大会」として、ワールドカップ創設の必要性をますます強く感ずるようになる。

私見ではあるが、アマチュアをオリンピックの参加資格として規定してしまったため、プロフェッショナルに対立したものとして、またプロフェッショナルと同様に外部から判断できる属性として理解されるようになってしまい、それがこのコトバを混乱させるに至った最大の原因であるように思う。アマチュアが、精神的な姿勢や考え方に関する言葉であるとし、スポーツを愛し敬う事を第一義に考えるのであれば、プロとして収入を得ていようが、プロのアスリートも立派なアマチュアであるとは考えられる。むしろアマチュアリズムに対立する概念は、コマーシャリズムと捉えるべきである。アマチュアの心を持ったプロのアスリートは、徒なコマーシャリズム（商業化）を拒否するのは当然な事であり、まさにここでアマチュアリズムとコマーシャリズムのバランスが求められるのである。

2. 4 有閑階級と近代スポーツ

鹿島¹¹⁾は、スポーツという語がフランスの古語で「気晴らし」を意味する *desport* からきているもので、その後貴族の気晴らしの中で狩猟を中心とした身体活動を指すようになり、更に下って気晴らしのための運動全体を意味するように

なつたと述べている。特に18世紀英国ジェントリー層において、特権的レクリエーションとして好まれ、紳士のたしなみとしてスポーツは普及していった。クリケットやゴルフや乗馬のクラブが設立されたのも18世紀の中期から後期にかけてのことである(注1)。この層はまたスポーツを単純な気晴らしとしてだけではなく、社交の場として積極的に利用をした。そこで自らの富を誇り、商売上のネットワークを形成し、さらには貴族層を招きコネを作る事等が目論まれていた。自分の娘を上流の家に嫁がせ、自らの一族が貴族の一派に入り込むというかなり戦略的な見合いの場としての機能があつたと考えられる。スポーツは当初から実際にするだけではなく、見たり、見せたり、見られたり、語り合ったりする事が付随する楽しみを提供する交流のソフトとして機能していた。

いずれにせよ日がな一日を費やしてテニスやクリケットに打ち興じることは、限られた階級にしか許されなかつた「気晴らし」であつたのである。この点をヴェブレン¹²⁾はスポーツが「有閑階級の顕示的閑暇」つまり「ヒマのひけらかし」として発生したことを指摘している。ヴェブレンは野蛮時代の文化が高度に発展して誕生した有閑階級をレジャー階級と呼び、その最高の発展型はたとえば封建時代の日本に見られると述べている。またこの階級の非産業的な職業として統治、戦闘、宗教的職務と同時にスポーツを挙げている。非生産的な職業につくということは、一般人に許されるものではない。それがこれらの職業を大変名誉のある象徴にする。有閑階級とはそうでないものに対する象徴的な存在として機能するのである(注2)。そして一般市民は競って有閑階級のマナーをまねようとする。スポーツが「持たざるもの」に対して「持てるもの」を象徴する存在として発展したという指摘は、当初から公共的で民主的なものとして発生したかのようなスポーツに関する従来の記述と真っ向から対立するものだが、大変興味深く、また説得的である。恐らく「公共」という概念を担う公とか、「民主的」を体現する市民

という概念の変遷に関わる問題がここには含まれている。この点については紙幅の都合でこれ以上触れないが、ここでスポーツが果たした象徴的役割という視点は重要である。

ところでスポーツの成立時における階級性を問題にする場合に、19世紀の英国におけるパブリックスクールが果たした役割は無視できない。近代になって、特に産業革命を経た英国社会において産業市民、つまりブルジョワジーが台頭し社会のヘゲモニーを握る。彼らはいわゆる無産階級と違い、裕福ではあるがそれまでの貴族と決定的に違うのはモノを生産する、つまり仕事をするという点である。そして仕事をする産業人として通用する人間を作り出す場として機能したのがパブリックスクールだった。ヒューズ¹³⁾の描くパブリックスクールをみれば、すなわちルールを重んじ、フェアに振るまい、友愛を忘れず、生産を通じて社会に奉仕することを徳目としていたことがわかる。これらを身につけさせるためにスポーツは理想的な装置として機能した。同時にその機能を果たすことを通じてスポーツ自体も洗練され、現在の形式を整えていった。そして産業主義が世界化すると共にスポーツも世界化していくことになる。

2. 5 スポーツマンシップと学校体育

学校体育として始まつた日本のスポーツの歴史も案外正統的な受容の仕方だったのかもしれない。ただし、問題があつたとすれば、その様式のみを受け入れ、肝心な精神的バックボーン、言い替えれば文化的な背景をほとんど無視してしまつたということだろう(注3)。小学校から始まる日本の学校体育の中で、スポーツが本来目的とした徳目の修養がどのようにプログラムされているだろうか。体育授業では、「早く走れ」と言われたり、「高く飛べ」と言われたりすることがある。あるいは「皆に合わせて手足を動かせ」という指導は何度となく繰り返される。しかしルールを遵守することの重要性や、フェアプレーや、相手を思いやることの必要性など、人間の尊厳についての理解に繋がる精神的な徳

目、つまりスポーツマンシップの教育こそが体育授業において重要である。早く走ることや、高く飛ぶことや、遠くへ飛ばすことは、スポーツマンシップの必須要素ではなく、それらはスポーツマンシップを習得する上で付随して身につく技術なのである。もちろんそれを1つの目的とすることは悪いことではないが、スポーツマンシップを伴わない運動能力の高い人間を本来はスポーツマン、あるいはスポーツウーマンと呼ぶことはできないのである。例えば国語辞典を開いてスポーツマンの意味を調べると「運動競技に秀でた人」等と書いてある。一方オックスフォード英英辞典で同じくスポーツマンを引くと、最初に「Good fellow」と記されている。つまりスポーツマンシップとは決して大学の文学部哲学科で初めて学ぶことではなく、「Good fellow」になるために幼少時に身につける修養徳目なのである。また決して学校だけで教わるものでもない。Sports-manがGood fellow(いい奴)という認識が一般に成立するためには、スポーツが少なくとも「善(Good)」き事であるという前提がなければならない。近代社会で「善」とあるという評価を得ているということは、スポーツが近代社会において社会的要請に答えているという現実と根差している。そしてスポーツが、啓蒙的であるという事は教育的であり、かつコミュニケーションを必然的に伴う。スポーツはその誕生時から見せるものとして、語られるものとして、言い換えればソフトとしてメディアとして誠に生産的な存在として有り続けたのである。

しかしスポーツの非生産的な側面であるゲーム性や遊戯性を否定するものではない。またスポーツには仕事と同様な生産性を求めることはできない。更に学校教育の中で徳目の修養と言ひ始めれば、戦前の軍事教育を引き合いに出し、国家主義に繋がる等の懸念を唱える向きも出てくると考えられる。スポーツが人間修養の全てを担うことはできないが、スポーツでしか学べないこと、それも肉体という物理的(フィジカル)なことに限らず精神的(メタフィジカル)

な事柄も存在するのは確かである。スポーツが社会に対して提供できること、それをスポーツのソーシャル・パフォーマンスと呼ぶことをここで提案しよう。特に精神的なもの、それも現在の日本においては少年教育、倫理教育に果たす役割が大変大きいと考えられる。現代の複雑化した社会の中で、人間の生に関する直截的な問い直しの契機を与える機会を提供し得る場として、スポーツは大変貴重なのである。スポーツという装置を通じ教師が生徒に、地域が児童に、親が子に、人間として身につけるべき基本的な価値観を伝えるのである。価値観などというと、崇高なもののように聞こえるかもしれないが、なにが大事なのか、なにを大事にしてきたのかという想いの共有されたものと考えればよい。その中には共同体が共有する記憶、つまり伝説もあるだろう。アメリカにおけるベースボールのようにスポーツが民族と国家の価値観をそのまま体现しているケースもある(注4)。

わが国日本ではどうだろう。相撲を語りながら礼節が語られているだろうか。高校野球では忍耐、克己、努力等は教えられているようだが、個人に向けられた能力の向上をはかること以外に、他人とか社会という他者との関係については問題にされているだろうか。サッカーでは「Jリーグ100年構想」というものが発表されており、サッカーによって地域に貢献することが謳われている。Jリーグのチーム自体地域との結びつきを前面に押し出しているが、実態はどうだろうか。スポーツ施設の拡充、提供という物理的な目標はともかく、サッカーを通じて地域の共同体に人格の優れた人材を提供しているだろうか。ジュニアチームの練習の時、指導者はスポーツマンシップを教えているだろうか。学校でいじめ等の問題が起こった時、いじめられている子を助けたり、いじめを阻止しようと立ち上がった子やする子はスポーツを通じて育てられているだろうか。地域の環境問題を解消するために立ち上がったゴミ拾いのボランティア活動に、スポーツマンシップを教えられた子供たちが参加しているだろうか。これらのことが現実化し

て日本中で見られる光景となった時、スポーツが日本の文化の重要な一翼を占めていることに異論を唱える者はいなくなるだろう。今、スポーツ関係者に求められることは実はそういう類のことなのである。それに応えるためにはスポーツ関係者各自が哲学を持つ必要がある。哲学を持たないと、例えばスポーツ振興投票導入に当たり、そこで得られるスポーツのための資金を使い「次のオリンピックで金メダルの数を増やします」などということが、あたかも真つ当な意見であるようにスポーツ関係者から表明されてしまうのが現状である。日本のスポーツ界における哲学の不在を露呈したコメントと言ってもよいだろう。日本のスポーツが文化的定着を進める千載一遇の機会を逸したまま、スポーツくじの導入の法案は議会を通過してしまった。幸いスポーツくじが実際に導入されるまでまだ数年の間がある。スポーツの側がスポーツの社会的価値についての見解、つまり哲学を示しその現実的な実現に向けてのプログラムを明らかにし、くじによって得られる資金がそのために必要であることを導入までに明確にすべきであろう。

3. スポーツとアイデンティティ形成について

人間とは言うまでもなく社会的な動物である。社会が存在せずには人間も存在しない。言い換えれば、社会の中で自分がしかなるべき位置にいるという感覚なしには生きていけない動物なのである。それを「生き甲斐」と言ったり、「アイデンティティ」と言うが、要は社会の中における自分の存在を実感することが生きる上で必要不可欠である。ところが現代はこの感覚を個人が実感することは大変困難になっている。社会が発展し、文明が高度化することが、逆に個人と社会との関係を希薄にすることとは考えてみれば皮肉な話である。特に今日の高度情報化という流れは、個人の実感脆弱なものにしている。そこで必要となるのは個人と社会の関係を実感させる機会、あるいは装置である。スポーツはその機会を提供する装置だと考えられ

る。それは近代スポーツというフィクションによって成立したという出自を持ちながら、少なくとも今日でもなおスポーツが公共的なものであるというフィクションが、リアリティ（現実感）を伴って成立しているからである。もちろんフィクションである以上、永久的で無謬なものではない。またスポーツだけが公共的な場を提供するのではないことも自明である。

例えば「環境問題」も物理的に人体や環境に被害が出ていることに起因しているのは事実ではあるが、今日のこの問題についての盛り上がり方には何か「公共的なもの」に個人として関与したいという個々のモチベーションが大いに寄与しているのではないかと推察できる。自分が社会に対して何がしかの寄与をしているという自覚は個人のアイデンティティの安定につながり、個人としての存在を実感してできる。フロム¹⁴⁾が指摘したように、戦争当事国の国民にはあまりアイデンティティの揺らぎは見られなかったり、またファシズムは国家が個人に対して徹底的に介入することにより、一時的にせよ自国の国民に対して強力なアイデンティティを与えるのである。

4. スポーツのソーシャルパフォーマンス

4. 1 公共心の育成

ソーシャルパフォーマンス、日本語で「社会的達成」というこの言葉は、社会に対してどう寄与するかという点を問題にしている。社会的責任という以前の考え方は、責任を問うといった形で用いられ、問う側と問われる側を区別し、問われる側に対し威嚇的なアプローチになりがちであった。しかし公共的な問題に関しては、問われる側も社会の一員である以上、その責任を果たさなければ社会に損害を与えるため自らもその被害者になる。社会の構成員という観点では、加害者も被害者の一員なのである。そこで問題解決のアプローチをネガティブに考えるのではなく、ポジティブに考えるために米国で生まれた言葉である。ここではソーシャル（社会的）という言葉が多分にパブリック（公共的）

という意味で使われていると考えてよい。公共的であるとは「公」と「私」の共通する部分であると考えられる。公的には関与しないとか、それは私的な問題だ、として自己との関与を否定する事は可能であるが、社会の構成員であれば公共的な問題に関して当事者でない者はいない。また社会的なパフォーマンスを検討するという発想には、社会的コストという考え方が裏打ちされている。例えば環境問題では、環境汚染を引き起こしている企業は他者に被害を与えているだけでなく、自らにも不利益が生ずる。環境問題を解消するための施策に税金が使われれば、もっと有効な所に向かうはずの資金が消費され、結果その社会が経済的な被害を受けて経済が沈滞すれば、あらゆる企業はその影響を受けるのである。

スポーツにこのソーシャルパフォーマンスの概念を当てはめてみると、5つの課題について大きな機能を果たせるのではないかと考えられる。①モラル②ライフ③コミュニティ④コスト⑤グローバルである。複雑化した現代社会において、自分と社会との関係が見えにくくなり、あらゆる分野でモラルハザードを起こす原因ともなっている。スポーツマンシップの習得を通じて、スポーツがモラル教育の場を提供するのは大いに意味のあることである。また生命、肉体、生活の質を高める場としてもスポーツは適している。近代化の過程で崩壊したコミュニティの再統合、再生、復活という課題についてもスポーツは有効な働きを示し、そのコミュニティにおける生活の充実は、きっと低コストの生活を実現させることにつながると考えられる。また低コストの生活は、ゴミも少なく環境にも優しいものになる。またスポーツがグローバルなコミュニケーションを可能にする点は言うまでもない。現在の日本ではとりわけ教育的分野において最もそのパフォーマンスを発揮することが期待される。近代スポーツの出自を想う時、教育的なスポーツとは確かに本卦還りのような印象を持つ、しかしかつての体育が優秀な兵士の供給を目的としたという点は、今日でも同様

なことが許されるはずがない。

日本では従来「公」はお上のことを意味し、一般人はお上の決める「公」事に従うものだと考えられてきた。そして「私」と「公」は明確に区別され、公私混同は厭うべきものだと言われてきた。しかし社会生活を営む上では、全くの私事とはいえないが公権力によって一々指示されるべきでもない事が多々存在する。もともと民主主義とは王権（お上の権力）を如何に制限するかという課題をもって始まった体制なのであるから、公権力に指示されることは最小限にするという発想が必要である。つまり自立した個人が自由に活動することが一番の基本である。独立しながら同時に共同体のためという「公共心」を持った個人であることが期待される。それが「市民」であることの最低条件なのである。ところがそれでも社会の中では軋轢が生ずる。その軋轢を裁くためのルールが法律である。また個人が個別で対処するより共同体全体が共同で処理した方が効率のよい事柄が存在する。その対処や、共同体を外部から守ったり、他の共同体と交渉したりする組織が必要となる。それが政府なのである。この様に理解する方が民主主義の理解としては正統的であろう。つまり公共心を有した独立した個人という「市民」の存在が、民主主義の大前提なのであり、その市民が存在しない民主主義などは、所詮単なる掛け声や見せかけでしかないのである。

ではその日本で「公共心」を如何にしたら培うことが可能であろうか。本来であれば共同体の日常生活の中で学ぶべき事柄なのであるが、本来の共同体が崩壊しているのが現状である。そこで公共心を身に付けるために最も有効な具体的テーマとして「スポーツ教育」と「環境教育」が浮上してくるのだ。どちらも生命や肉体を扱うものであり、現在の日本では最も受け入れやすく、また地球的規模で共有が可能なテーマである。

「環境問題」に関して言えば、従来のアプローチが法律というシステムのものと、ニューテクノロジーによる新素材の開発や省エネの推

進というハードによる2つが主であった。どちらも一般人にとっては自らが主体として活動する領域ではない。しかし環境先進国と言われるドイツや北欧諸国の例を見てもあきらかなように、生活する人間の意識を根本的に変えない限り事態の改善は中々望めないのは明らかである。そしてその意識改善のためには有効な環境教育が必要なのである。

「スポーツ教育」も同様に、スポーツマンシップを培う事を通じて、公共心を養うことができよう。また個性を伸ばし自立心を育むことにより健全な民主主義を実現する人材が育つだろう。大西¹⁵⁾は、「闘争の論理」という本のなかで、「スポーツの最大の社会的価値は民主主義の実現だ。」と述べている。更に言えば「スポーツ」も「環境」も共同体という発想が必要とされるため、必然的に地方自治をも進めなければ効果は望めない。そして地方自治こそがまた民主主義の実現を可能とする大きな鍵なのである。

4. 2 老人医療費

またスポーツは、老人医療費の問題と犯罪に関するコストに対し、一番有効と考えられる。1997年7月19日付の読売新聞¹⁶⁾に掲載された厚生省の発表によれば、日本の国民医療費は96年度で28兆5210億円となり、1人平均22万円を超えている。どちらも過去最高で、1人あたりの額では前年比5.5%も増えている。この結果、国民所得に対する国民医療費の割合は7.09%から7.27%にもなる。驚くべきは、保険制度別にみると70歳以上の高齢者にかかった医療費は9兆2898億円で、前年度に比べ9.5%増という突出した伸びを示しており、医療費全体に占める割合もほぼ3分の1である。高齢化の進行が医療費全体の伸びを押し上げている実態を浮き彫りにしている。これに小児化という傾向を加えて検討すれば、若年層の一人あたりの負担増と、その帰結として年金制度の崩壊というシナリオを描くには、それ程高度な想像力を要しまい。将来に対する漠たる不安が、貯蓄率を押し上げ、消費に向かわず、現在の不況を長引かせている

原因の1つともなっている。今後は、医者にかからずに済む健康な体作りという問題が浮上するのは間違いない。それはまたスポーツのソーシャルパフォーマンスを高める機会でもある。

4. 3 犯罪抑止

またスポーツは犯罪発生の抑止力にもなる。現在犯罪と脳の関係の研究が進んでいる。例えばモアラ¹⁷⁾は、前頭葉の一部に損傷があったり、ある種のホルモンや化学物質（テストステロンやセロトニン）の分泌が少ない者は善悪の区別が付きにくかったり、悪行が露見することに対する恐怖が湧かなかつたりして、常習犯罪者になりやすいことを述べている。一種の遺伝子決定論的な議論にも結びつきやすいので、慎重な対応が必要である。

つまり「生まれつきの札付きはいるのか。」それとも「環境が人を犯罪者に仕立てるのか」という議論ではなく、「両方が相互に関与して犯罪行動の発現の確率を高める」のである。例えば貧困についても、それ自体が犯罪の原因ではない。性格、神経科学、遺伝子、ホルモンを通じて、犯罪寄りに傾いている精神を貧困が後押しして、拍車をかけているのだ。但し「犯罪者への道を歩いたと思われる者は、持っているカードの手が非犯罪者と違うこと」が最新の研究でわかっている。

通常脳は身体の活動に指令を与える立場にあるが、この関係が可逆的なことも我々は経験的に知っている。例えば指先に刺激を与えることによって脳の老化防止を図ることが可能だとし、老人に麻雀を進めたりするのである。つまり遺伝的あるいは後天的に獲得した何らかの脳内障害を、薬物による化学治療や外科手術以外に、スポーツという身体活動である程度解消できるとも考えられる。また年齢に関係なく、様々な抑圧から生ずるストレスを解消するには、スポーツが最も手軽で有効なもの我々は経験的に知っている。それも犯罪の発生を抑止する効果があると思われる。スポーツと精神的ストレスやホルモンバランスの関係等は、専門家の今後

の研究に期待される。

4. 4 経済

更にスポーツは経済的な側面でも一定の役割を果たす事が可能である。

現在日本の経済が陥っている深刻な下降は、もちろん基本的にはバブルの後遺症としての不良債権が原因ではあるが、国民の心理的な側面とも推測される。即ち「将来の不安による消費控え」がその第1である。他の1つは飽食の時代となり、生活の基本的な物資を既に獲得した事と、魅力ある新商品が登場しなくなっていることに起因する消費意欲の減退である。いずれにせよ消費控えが経済の循環に負のエネルギーを与えている。ではスポーツはこの2点を解消する事に対し、契機を与え得るであろうか。

例えば97年W杯サッカーのアジア予選の最終戦、日本対イラン戦では遠くマレーシアのジョホールバルまで日本から約8千人が駆けつけた。このツアーは10万円前後という決して単価の安い商品であった。しかも開催地が一週間前に決定したということにも関わらず、約8千人が情報を収集し、渡航している。つまり魅力ある商品があれば、金を払う事を厭わないし、スポーツはその魅力を与え得るのである。因みにここで50%近くの驚くべき視聴率をマークし、その後のメディアに大きな影響を与えた事は、W杯関連で60冊以上の本が出版されたり、TV番組の「W杯特集」の多さからも明らかである。またW杯関連グッズの氾濫は今更言及する必要はないだろう。あるいは、98年夏代表チームの応援のため渡仏した日本人の数からも考えられる。

4. 5 地域振興

最後に93年のJリーグ発足前後からすっかり一般的になった観のある「スポーツによる地域振興」という点である。もちろんそれはスポーツのソーシャルパフォーマンスであるが、ここで言われている「地域振興」或いは「地域の活性化」とは何を意味するのかを明確に定義する

ことが難しい。

例えば「長野五輪」を考えれば、招致活動の時点から実施に至るまで「五輪開催による長野地域の活性化」というテーマは一貫して掲げられていた。しかし大会終了後にそのテーマが達成されたかどうかという調査と検討がされたか不明である。大会直後に会った関係者達は、閉会式のサマランチ IOC 会長の賛辞を大会成功の証としていた。また船木選手や原田選手の活躍が大会を盛り上げたことを大会成功の根拠にあげた人も少なくない。だがこれらの見方は、実はスポーツの側からの評価でしかなく、社会的な評価、つまりソーシャルパフォーマンスという見地からの成果は不明である。国際スポーツ大会招致の際に良く使われる「大会開催による地域の振興」なるテーマの達成度を具体的に測るメルクマールが欠如しているのである。事後の評価が不明確であれば、経験がノウハウとして蓄積される事もない。あれだけの時間と金とエネルギーを費やした「長野五輪」は、確かに「原田の涙」という感激のシーンと共に美しい記憶ではあるが、現実を得たノウハウがただ大会運営程度のものでしかないとすれば、少々物足りないと思われる。今後の国際スポーツ大会を開催する際、「地域の振興」に関して一つの目安として結実させ、そこで提出される調査結果が元になり、一つの目安が与えられ、さらにそれが洗練されていくことで、国際スポーツ大会開催のソーシャルパフォーマンスを測るメルクマールが必要になると考えられる。実際この具体的な達成度を測るメルクマールがなければ、大会開催に関するアカウントビリティも問えないことになる。

5. お わ り に

スポーツは個人と社会との関係性が不明確になってしまった今日の高度情報化社会において、その関係を実感する機会を容易に、かつ自然に与え得る装置である。それがスポーツにより地域振興が図り得ると考える根拠であるし、「Jリーグの100年構想」という理念もこの点に立脚し

ていると理解できる。それがスポーツのソーシャル・パフォーマンスを問うスタート地点となり、この点に配慮せずに今後のスポーツのあり方を考えることは問題の解決に向けた議論の成立を困難にする。

スポーツがスポーツをしている者だけのモノならば、スポーツが公共的な存在だとは言えない。スポーツ関係者の時として排他的とも見える態度は、自分の権益を守るためには有効であるが、スポーツ自体の拡張、発展には寄与しない。勿論外部もスポーツに対する理解が不十分であるが、だとするなら理解を進めるのが内部の人間の義務である。従って不十分な理解とは、スポーツの側の怠慢も問題である。スポーツを外部に開放することは、そのスポーツ内部における従来の関係者の支配できる領域を相対的に狭める。だがスポーツの拡張により絶対値としての権益領分は確実に拡張されていることになる。

スポーツの素晴らしさをスポーツ内部のロジックで証明するのは不可能だという点、今更論を待たない。スポーツの素晴らしさとは、社会におけるスポーツの外部との関係を通じて立証が可能であり、「スポーツはスポーツだから素晴らしい」等というのは「神は存在するから存在する」という宗教と同じことである。スポーツがスポーツ教となればもう既に一般性と公共性を放棄したも同然である。現代のスポーツはスポーツの外部に向かって説得力のあるコトバと論理を見出し、発信し、常に開放的でなければならないのである。

(注1)例えばゴルフのセントアンドリュース・クラブも1754年に設立されている。

(注2)ヴェブレンがこの本で指摘している有閑階級の「顕示的消費」、つまり見せつけるための消費とは、ボードリヤールが70年代に指摘することになる「象徴としての消費」論を想起させる。

(注3)これはスポーツ以外のもの、例えば「民主主義」等も同じ道を辿ったように思わ

れる。戦後の民主的な憲法も西欧の文明を安易に形式のみを取り込んできたわが国の対応も例外ではない。我々は字句の背後に流れる近代市民社会の思想まで理解して受容したのかどうか大いに疑問が残る。

(注4)例えば、ケビン・コスナー主演の「フィールド・オブ・ドリームス」がある。

参 考 文 献

- 1) 玉木正之；Jリーグからの風，第1刷，集英社，pp. 8-20, 1993.
- 2) 稲垣正浩；スポーツの後近代，第1刷，三省堂，1995.
- 3) 多木浩二，今福龍太；対談多木浩二×今福龍太スキゾフレニック・サッカー，新書館，大航海 No.2, pp. 74-91, 1995.
- 4) K・ブランチャード，A・チェスカ（大林太良監訳，寒川恒夫訳）；スポーツ人類学，初版，大修館書店，p.196, 1988.
- 5) R・トマ（蔵持不三也訳）；新版スポーツの歴史，初版，白水社，p.32, 1993.
- 6) R・トマ（蔵持不三也訳）；op. cit., p.19, 1993.
- 7) 鹿島茂；フランスにおけるスポーツ，スポーツという文化，初版，TBSブリタニカ，p.101, 1992.
- 8) 鹿島茂；op. cit., p.112, 1992.
- 9) 鹿島茂；op. cit., pp.106-107, 1992.
- 10) J・リメ（川島太郎，大空博訳）；ワールドカップの回想，第1刷，ベースボールマガジン，pp.5-7, 1986.
- 11) 鹿島茂；op. cit., p.96, 1992.
- 12) T・ヴェブレン（高哲男訳）；有閑階級の理論，ちくま学芸文庫，1998.
- 13) T・ヒューズ（前川俊一訳）；トム・ブラウンの学校生活，岩波文庫，1952.
- 14) E・フロム（日高六郎訳）；自由からの逃走，東京創元新社，1966.
- 15) 大西鉄之祐，他；闘争の倫理：スポーツの本源を問う，二玄社，1987.
- 16) 読売新聞（東京）1997年7月19日.
- 17) A・モア，D・ジェセル（藤井留美訳）；犯罪に向かう脳：人を犯罪にかきたてるもの，原書房，1997.